

《林鶴梁について》

満徳寺に幕末の代官三学(高い教養と学問のある名代官)の一人、林鶴梁の義母の墓があります。

嘉永六年(一八五三)六月二十七日、鶴梁は江戸城にて老中の松平忠固より中泉代官を任せられます。中泉代官は役高百五十俵、その支配地域は遠州から三河の約六万石近い幕府領を直轄し、代官所・陣屋は現在の磐田市・中泉にありました。

安政元年(一八五四)の安政東海地震や安政二年の大水害では、自らも被災しましたが、積極的に広範囲の領民への救済活動を行いました。また詳細で正確な新しい三遠地図を作りました。

安政四年に義母(先妻 久の母)が亡くなり、満徳寺にて葬儀が行われ、立派な墓碑が建立されています。安政五年(一八五八)三月に、羽州柴橋代官へと任地替えの命が幕府より下った為、義母の墓を永代供養として満徳寺に残しました。同年五月晦日、鶴梁は中泉を去るに当たって、その墓前に別れを告げたことが『林鶴梁日記』に記されています。

その後鶴梁は、文久三年に「和宮様下向の御馳走賄御用」役、翌年御納戸役に昇進、さらに新撰組の前身である新徴組の支配役になりました。この後、昌平坂学問所頭取を勤め明治維新を迎えます。

薩摩藩家老の小松帯刀より新政府への土官をすすめますが断り、麻布谷町にある屋敷の漢学塾「端塾」で後進の指導にあたり、余生を送りました。その中の門下生には犬養毅も名前を連ねています。

鶴梁は大変に梅花を好みました。『林鶴梁日記』の安政二年二月二十三日の記載には、

「陣屋梅花盛開二付、役所一統之もの共、住居江相招キ、酒遣候事」

とあるように、中泉代官所の梅の開花の盛んなるのを愛で楽しんでた様子が伺えます。江戸の屋敷の庭には多くの梅を植え、「梅花深処」と命名しています。

維新後、外出の際は「何の面目あつて天日を仰がん」と深編笠を被っていました。

明治十一年(一八七八)二月十六日、「我、病の為に身を滅ぼさる。しかれども、武士たるもの婦女子の手に依り、枕にもたれて死すべきにあらず。」と云つて、床の上で大小両刀を握り、端座したまま七十三年の生涯を閉じました。